

自然への畏敬

川上 幹太

奨励者紹介[かわかみ・かんた]

日本キリスト教団長浜教会牧師

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。」

(マタイによる福音書 6章25—30節)

カニとの出会い

皆さん初めまして。長浜教会牧師の川上幹太と申します。同志社大学神学部、神学研究科を卒業して牧師の仕事に就いたのが2000年3月で、17年前ですね。チャペル・アワーには初めて呼ばれました。滋賀県は琵琶湖の北東にある長浜というところに14年住んでいます。特技はマンガを書くことで、2年前から日本キリスト教団出版局の雑誌『信徒の友』に4コママンガの連載をもらい、マンガ者としては長い念願であった原稿料をいただいてマンガを書くということをさせてもらっています。でも今日はそっちのお話ではありません。

私は子どもの頃から海が好きで、よくカニなど、水辺の生き物を捕まえていました。父が牧師で、牧師の仲間によく釣りに行っていました。最初はそれに付いて行くだけだったのですが、だんだん釣りじゃなくて直接岩場の生き物を探すのが中心になっていきました。ちょうどその日、近くの釣り人が大きなカニ(ワタリガニの仲間)を釣り上げ、それをくださって、その形や色に魅かれました。そのカニは図鑑で見ると小さくて地味なのですが、本物はすごく鮮やかで迫力があつたのです。海にはこんなすごいカニがいるのか、と感動しました。それから頻りに海に行くようになり、カニを探しました。

持って帰っていつも見ていたい、という欲望のままに水槽を用意して飼育するのですが、とても大変です。まず、海水は持って帰った分しかありません。狭い水槽ですぐに汚れてしまいます。しばらくして人工海水なるものがあることを知り、それを使いました。ろ過装置も、海水に対応したものにしなないとイケません。しかしここまでが小学生の限界のようで、取ってきた生き物たちを長く飼育することはできませんでした。中学生ぐらいになるとゲームにはまって、長いあいだ自然からは遠のいていました。この趣味が再燃する

のは、牧師として働くようになってからです。担任教師であった南大阪教会では、付属施設の幼稚園があったこともあり、子どもが喜ぶような珍しいカニを見せてあげよう、と思い立って、大阪の海や川で探しました。子どもに見せて喜ばそう、というのは一応の理由ではありますが、実際は自分の趣味の世界を突き進んでいました。

カニを幼体から育ててみた

ところで皆さん、カニは生まれてからどのように育つかご存知でしょうか。サワガニという淡水に住むカニは、一生淡水で過ごします。子どもは卵から直接カニの姿となって生まれ、しかも母ガニはしばらくの間子ガニをおなかに抱いて守ります。少なく産んで、一つひとつの個体を大切にします。

これに対して、サワガニ以外のカニは、卵からゾエアというとても小さな幼体(プランクトン)が生まれ、これは親とはあまり似ていなくて、シッポがあって泳ぐ生活を送ります。よく、ちりめんじゃこに紛れていることがあります。一度に1000匹以上が生まれます。そのうち親と同じカニになれるのはごく少数にすぎません。

この生態に関して、たとえばNHKの「ダーウィンが来た!」などで見る機会のあるのが、満月の夜に、普段森に暮らすアカテガニが集団で海に降り、子どもを海に放す、という場面だと思います。

たくさん生まれて、途中で魚などに食われるものも、そのことで命の連鎖の一部となっているのであり、ここでどちらが優れているかという判断をするのは、やはり人間の主観というものでしょう。ただ生物学的には、サワガニは最も進化したカニと言われるようです。

実は水槽の中でも、時がくれば、カニは卵を産んで、子どもを水中へ放します。自分が子どもの頃は育てることはできなかったのですが、大人になり牧師であったある時、ゾエアを育てて立派なカニにしてみたい、と思い立ったのです。

それには本来設備を整えなくてはなりませんが、調べても分からず、小さな水槽を用意して毎日手作業で少しずつ水を入れ替えることにしました。機械でろ過するとみんな吸い込んでしまうので、茶碗で水槽の水をすくってゾエアが入っていないことを確かめて水を捨てました。だからすごく時間がかかりました。

さらにゾエアは肉食で生きてプランクトンしか食べないので、通販で動物プランクトンを買って、それをさらに別の植物プランクトン(これも通販)で増殖させて、エサにしました。他のプランクトンをさらに2種類育てるといことです。

こうして40日間、毎日お世話をしてがんばって育てた結果、1000匹ぐらいいたのが、10匹残ってカニになりました。これが成功であったのか失敗であったのかは分かりません。やはり、毎日朝晩2回の水替えがしんどかったですね。

疲れた気持ちである日、海まで水を汲みに行くと、日が沈む頃で、海も夕焼けで赤く染まって、やたらと広く大きく感じられました。その時ふと、ごく当たり前のことに気付いたのです。自分は何をやっていたのだらう。なんだ、ここに、カニが育つのに一番適した環境があるじゃないか、と。自分は部屋の中で、自然の海と同じ環境をつくろうとしたけど、すごい無理してたなと思いました。何か全部のことを自分でしないといけないと思っていました。でも自然の中では、エサをあげたり水を替えたりすることはいらぬのです。カニたちは生きていける。誰かが造った途方もなく大きい水槽、この海の中で養われているのです。

だから、自分のしていたことって本当に小さいな、と思われました。すべては、自然の生き物を自分の手の届くところに置いていつも眺めていたいという、自分勝手な欲望から始まったことでした。つまり、マニアックな趣味を突き詰めていって、「自然ってすごい」と感動するところまでいけたということです。

自然の背後におられる神

聖書はこの自然世界について、偶然にできたものではなく、意味があって造られたものとして説明しています。聖書は、自然を何をするか分からない恐ろしい存在とは考えません。森羅万象、すべてのものの背後に造られた方、神がおられ、その神が定めた秩序のままに自然は動いていると考えます。だから、空の鳥は神が養っておられるのであり、野の花は神が装ってくださるのです。

このことを、私もよく忘れそうになります。人間とは、思い悩む者なのだと思います。私もよく日常の小さなことに神頼みをします。無事であること、健康、争いが無いことを願います。しかし、イエスさまが約束している神の恵みとは、そういうこととは少し違います。

神さまは人生全体を導き、守り、養っておられるのです。肝心なことは、どんなことがあっても神さまを信頼し続けるということです。神さまが確かに自分を愛し、守り、導いてくださることを信じ続けるということです。神がそのように働いておられる証拠が、空の鳥が生きていけるということであり、野の花が美しく咲くということなのです。

しかも神さまは、造られたものの中で特に人間を愛しておられます。自然の中では非力な存在にすぎない人間に対して、あなたには価値がある、存在意義がある、と言っておられるのです。神さまは、日々食べるもの、着るものを求めて仕事に精を出している者を支えないはずがありません。労働らしきことをしない鳥よりもはるかに多く報いてくださるのです。

だから、時には立ち止まって、空を見上げて鳥を眺め、しゃがんで野の花を見つめなさい、とイエスさまは言うのです。そこには、神さまが働いておられる証拠があり、鳥や花をとおしていつも私たちにメッセージを送っておられるのです。

そのメッセージを受けた時、人は感動するのです。海の広さに驚いて、小さな命の生きる環境ができていくことに驚くのです。神の働きを真似することは自分には絶対できないと思わされます。しかしまたそこには、細やかな配慮をもって命を養っているお方が確かにおられるのです。私は小さな命を育てるために、水替えて誤って流してしまわないように、茶碗で水を替えて気をつけていましたが、それよりもさらに大きな、行き届いた心づかいで神さまは養っておられるのです。そう思うと、自分にははるかに多くのものが与えられていると思えてきます。

自然に触れて感動する経験をとおして、自分を越えた存在を感じ、さらにその方の愛を感じることであればいいなと思います。